

「八月六日から一五日」を語りつぐこと

中村悦子

八月号の緑蔭図書の紹介の依頼を受けたとき、すぐに浮かんだテーマが、「八月広島」というものでした。八月の広島を訪れていない私にとって、それは年毎に大きくなっていきます。「ヒロシマは、世界の人びとにとって、もはや単なる地名ではなく平和のシンボルです」といわれる。戦後四十年をへる中で、戦争・原爆の体験は、風化させてはならず戦争反対を含みながら更に進んで平和への希求となって歩み続けられるものでしょう。

そして今、もう一つの面から戦争平和の教育について考えています。それは、絵本のテーマ分類の研究とつながっているのですが、ミシガン州立大学の友人、P・シアンシオロ教授が、子どもの絵本の世界への案内に、四つの入口と領野を示しているのです。つまり、「わたしとわたしの家族」「他の人々」「わたしの住む世界」そこで「想像の世界」と。

その中の一つ「わたしとわたしの家族」というテーマは、「わたしは誰?」という子どもの自己確認の欲求の表れともいえる根源的な問に根ざしています。そして、この問は、「わたし」の確かな成長の確認と、身のまわりの親しい人がわたしを愛しているという自己肯定が育つことの中に深まっていきます。この絵のテーマに描かれているものは、本の中の主人公の経験であっても、それを読むわたしたちに、自分のものと呼応する共通の意味のあるものとして捉えられるでしょう。つまり、普遍的な経験です。

そして、子どもは、もう一面、自分または家族や民族が極めて独自なありようの中で人となっていく、その自己確認の過程を体験します。独自の民俗、文化を生きる人となりを持つと、それらに即していえるであろうかと思えました。思案の末、私がたどりついたので、戦争を語りつぐ伝承と平和を希求し実現する創造とが生み出す民族精神ではないかと思うのです。そこで、この戦争と平和を語りつぐ精神が、子どもの本（絵本）にどのように具体化しているか、関心をもって見始めています。

八月の暑い夏、それは厳しさ故に日本人にとって戦争を考えるに最も適わしい時期です。私のささやかなノートの中から、幾冊かを取りあげてみました。

『親と子のための平和教育』 荘司雅子 広島平和文化センター (500円)

私は最近までこの本を知りませんでした。きっかけは、OMEPP (世界幼児教育機構) 会議の席で、欧米で幼児の平和教育を語るとき期待の目が日本に注がれるが、資料は意外

に少なく、この著が話題にあげられるとききました。求めに応じて、著者から「押しつけになっても思つて」との伝言と共に贈られたものです。

氏が個人的なヒロシマ体験を越えて、八〇年のヒロシマ宣言の起草委員長となり、この小著をあらわすに至つた想いを知ることができます。

*

「核兵器の恐ろしさは体験した人でなければわからない」と先の著にもありますが、こと戦争・核のことは、再び体験を通して味つてはならないという条件下で伝えられなければなりません。そうしたら、戦争を子どもに語りつぐ、しかも追体験できるようなものとして語りつぐとは、どうしたらよいのでしょうか。

その点、絵本は絵画芸術の方法をとつて戦争再現の試みのできるものといえるかもしれません。中でも『ひろしまのピカ』（丸木俊・小峰書店）『猫はいきている』（早乙女勝元 田島征三画 理論社）、最近作『りゅう子の白い旗』（新川明 篠間比呂志画 築地書館）には、各々、広島、東京大空襲、沖縄戦の様相が生々しく描かれています。そして三作目を例にとれば、「りゅうぎゅうのりゅう子」という一人の少女に即して語ることで、戦火の中の沖縄の子どもの受難を典型的に描き出そうとの意気が伝わります。しかし、再現の試みは、常に事実との乖離もまた生ずるものです。

*

松谷みよ子氏は、この間のことを次のように書いています。戦争の話をきいてくる宿題

が出たというので、小学校の娘に指が痛くなつたというまで書きとらせました。それなのに不満なのです。(略)はっと気がつきました。戦争を語りつくすという事は、説明することではないのだ。ともすれば私たちは説明し、教えようとしているのではないでしょうか。実感の重みこそ求められているのに。(略)「(『ぼうさまになったから』松谷みよ子。司修 借成社の表紙のことばより)

実感の重みを伝える——本当にそうなのです。この点、松谷の『ぼうさまになったから』(前掲)は、戦争の描き方の視点が少し異なります。この点は、作者が民話採集の私の中で出合った話をもとにしたものです。「太平洋戦争後終戦直後、烏がいなくなった。シベリアへ行ったと話し合った』『現代民話考』立風書房)と。日本には、烏と死者とをつなぐ俗信があります。そのせいでしょうか、この話を聞いたとき、はっとするほど鮮明に、死者を弔うメッセージを受けとめたことを覚えています。今次の戦争の中から、口づてに語られ、現代の民話として形成されるかもしれない貴重な一つです。

これが絵本になり、司修氏のぼうさまに変身していく烏の造形によって、これまでの泣き声に加えて新しい烏像が生み出されたように思います。

(大妻女子大学)